

狩猟民を横目で見ながら言葉の海で舵を取る :
池澤夏樹のネイチャーライティング

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38448

ネイチャーライティングという文学ジャンルがある。自然と人間の関係をテーマとするノンフィクションエッセイを指し、アメリカ合衆国を発祥の地とする。ネイチャーライティングの父と呼ばれるH・D・ソローは、都市化と商業化の進む一九世紀アメリカで、生のあり方を根源的に再考するためにマサチューセッツ州の森に入り、自然観察と哲学的思索と自給自足の生活を送り、『ウォールデン』を書いた。日本ではこの作品は明治期から翻訳され読み継がれているが、おそらくネイチャーライティングというジャンルが知られるようになる二〇世紀後期まで、エッセイの文学的評価は高くはなかったし、現在でも高いとは言えない。詩や小説や戯曲とは異なり、一人称で書かれる文章は概して低級とみなされる向きがある。だが、まさにこの一人称の文体という点にネイチャーライティングのおもしろさがあるのだ。

自然観察の客観性を前提とするナチュラリストリーとは異なり、ネイチャーライティングでは自然と向き合う(私)の感覚、思索、想像力は排除されない。むしろそれらにもとづいて言葉が紡がれる。書き手の驚き、動揺、自問、そういった揺れが揺れのまま言語化されてゆく。自然を対象化する固定した立ち位置というものがないから、自然へのアプローチの仕方も定まっていない。哲学者鶴田清一

狩獵民を横目で見ながら 言葉の海で舵を取る

—— 池澤夏樹のネイチャーライティング

結城正美

Yuki Masami

Critic

は、反方法主義を特徴とするエッセイを「非方法」の方法として、ものごとの細部に、その髪や肌理を微細な感触のままにとりだそうと「する試み」として再定義しているが、ネイチャーライティングというエッセイもまた、自然と人間の関係という揺れをその感触のままに描き出そうとする文学的試みにほかならない。

自然と人間との関係をテーマとするという意味では、『見えない博物館』『母なる自然のおっぱい』『楽しい終末』『アマバルの自然誌』などに収められている池澤夏樹の一連のエッセイはまぎれもなくネイチャーライティングである。自然と交渉を重ねる過程で立ち位置が揺さぶられ刷新されるという現象が、池澤のエッセイの随所にみられる。具体的な事例を挙げるよりも、『母なる自然のおっぱい』の「あとがき」にある次の箇所を引いておけばよいだろう。ここに書き手のスタンスが明快に表明されているからだ。

今、自然について書かれた本は多い。それらはおよそ二つに大別される。第一は、自然がいかに雄大で、崇高で、繊細で、微妙で、見るものをいつまでも飽きさせないかという讃歌である。もう一つは、このままの生活を続けてゆくといずれは人間が自然を破壊してしまうという警告である。もちろんどちらも正しいし、もっともな

ことだと思う。

しかし、根本的なところで人間と自然とはどういう関係にあるのか。自然の美を愛する人間の営みが、なぜ他方では自然を破壊することになってしまうのか。われわれの日々の生活がどういうメカニズムを経て自然を変えるのか。そこまで踏み込んで事態を解明してくれる本は少ない。だいたい自然をどんなものだと思って人は議論をしているのだろうか。

日本にネイチャーライティングなるものが輸入される以前から、池澤は自然と文明をめぐる言説の危うさを熟知し、文明批判を開陳するのでも自然礼賛に陶醉するのでもない環境言説の方位を見据えていた、と再認識させられる一節である。いや、そんなふうに言うのと、いかにもアメリカが環境言説の先進国で、池澤という書き手がそれよりも先を行っていたというふうには聞こえるかもしれない。実際のところ、池澤はアメリカ的価値観にはあまり関心がなさそうである。旅好きで知られるが、アメリカ本土を初めて訪れたのは

一九九一年、四〇代半ばであったという。おそらくその背景には、「アメリカというのは実に人工的な、広大な自然の上に人が造った文化が軽く乗っているような文明なのではないかと予想」があり（それが外れていなかったことが最初の短い滞米で確認されるのだが）、人と自然との関係という点で現代アメリカに学ぶことはないという直観があったのだろう。（そう考えると、ネイチャーライティングというアメリカの呼称は池澤にとって好ましいものではないのかもしれないが、エッセイの再評価を促し、自然へのまなざしを多角的に深化させたというこのジャンルの肯定的な面を強調し、許しを請いたい。）

さて、先の引用に示されていたように、池澤の関心は「人間と自然とはどういう関係にあるのか」という点にあるが、この書き手の見据える「自然」には二つの顔があるように見受けられる。ひとつは人間がうまく折り合いながら生活の糧を得てきた身近な自然であり、もうひとつは人の手が（ほとんど）加わっていない原生自然だ。無論、人の痕跡を残さない自然とのつきあい方もあるので、二つの



『見えない博物誌』(一九九六年・小沢書店) / 二〇〇一年・平凡社ライブラリー



『エデンを遠く離れて』(一九九四年・朝日新聞社) / 一九九四年・朝日文芸文庫



『母なる自然のおっぱい』(一九九六年・新潮社) / 一九九六年・新潮文庫



『楽しい終末』(一九九七年・文藝春秋) / 一九九七年・文芸春秋文庫

顔はまったく別のものというわけではない。また、いずれの自然も現代文明によって変容や衰退を強いられてきたという点で共通している。

現代文明の侵蝕を受けていない自然は確実に身の回りから消えつつある。だから、自然なるものを求めて池澤は旅に出る。アメリカ本土には得るものがなさそうだという直観がはたらいたように、この書き手は自然なるものが残っている土地を嗅ぎつけ、現地へ向かう。数日の短い滞在もあれば、那覇、知念、フォンテーヌブローのように数年に亘る滞留もある。また一回限りの訪問もあれば、白山の麓の白峰のように繰り返して足を運ぶ土地もある。

池澤のエッセイを読んでいると狩猟のイメージが喚起されることがある。それは、ひとつには池澤の文章に〈狩猟〉という語が頻出するからだろう。狩猟民であったアメリカ先住民やアイヌの話、あるいは狩猟民的生き方を現代社会に示した星野道夫や植村直己をめぐる文章など、狩猟に関連するエッセイは少なくない。たとえば、こんな一節がある。

〔……〕もともと狩猟者は謙虚だった。力が対等なのだから、謙虚という姿勢によってもう一步動物の方に近づかなくは獲物を持って家に帰ることはできない。自分の足で荒野を歩き、その時期に身を置くべき唯一の場まで赴いて、そこで待つ。自然の方が決める時と場所と方法を学んだものだけが自然から恵みを与えられる。

〔……〕

その意味では星野は狩猟者であるかもしれない。彼はまずもって

自然の中に入ってゆき、実に謙虚に自然を学び、その結果獲物を得て、その成果に感謝する。彼の写真はそのまま感謝の儀式である。¹⁾

ここで論じられている狩猟者星野道夫はもちろん狩猟民そのものではなく、狩猟民的な自然との関係を具現する存在にはかならない。字義どおりの狩猟採集時代は遠い過去だが、「自然の中に入ってゆき、実に謙虚に自然を学び、その結果獲物を得て、その成果に感謝する」という狩猟民的な自然との関係は絶えたわけではなく、たとえば星野という存在をとおして幻視されるものだということが、静かに主張されている。

狩猟民的生き方を追って、池澤は世界各地に足を運び、古今東西の書物の森に分け入る。感情に流されず、かといって感情を排除するわけでもない文体は、狩猟民という参照点に対する理性的な距離感にもとづくものであるように思える。この距離の取り方がどういうものなのか、具体的に説明しているのが次の一節だ。

今から戻ることはいらない。われわれにできるのはただ昔を思い出して、自分が今いる位置を確認すること。岸からそんなに遠く離れて沖へ出てしまったわけではないことを確かめて、せめて岸が見える範囲を漂うように舵をとること。ほんの数世代前は狩猟で暮らしていた事実を忘れないこと。そして、たぶん、死を恐れないこと、²⁾ だろう。³⁾

狩猟の世界を横目で見ながら、池澤は現代社会という海で舵を取

る。即かす離れずの距離を維持するのは容易なことではないだろう。舵取りを怠れば、沖へ流されてしまいか転覆するのが落ちだ。

狩猟民の世界とは、自然と近い生の営みが実践されている現場と言ひ換えることができるだろうが、そういう現場をめぐるエッセイを読むと、舵取りには経験から生み出される身体的感覚と想像力が重要であることがわかる。たとえ、食の崩壊が嘆かれる現代日本にあって例外的に土地の食文化を保持している沖繩を紹介した『神々の食』を開くと、文章の端々に稲刈や田芋カインムの収穫に励む池澤の姿があるが、それは身体知、経験知、現場の知、それらにもとづく想像力をインターフェイスとして、失われた自然との関係に接近しようとする作家の文学的試みの実践の一コマであるように私には思える。

自然と近い生き方を具現している人たちへの接近を試みる一方で、池澤は、人のいない自然にも赴く。「われわれがふだん見慣れているのは、都市の中にせよ農村にせよ、人間によって手なずけられた風景ばかりだ。あるいは人間を甘やかす風景と言ってもいい。

そういうところだけを見てみると、世界全体が人間のために用意されているという錯覚に陥る²²。沙漠のような、人の気配がなく地質学的時間に支配された風景に身を置くことで、池澤が狩猟民の「謙虚さ」とよぶ、世界における人間の小ささを感得することができれば、それによって狩猟民の記憶が蘇るのかもしれない。

池澤の舵取りは、『楽しい終末』のように敞しさが滲み出ている場合もあれば、『むくどり通信』のように愉快さが前面に出ている場合もある。そのような相違に、人と自然との関係をめぐる書き手の思索の振幅が表れているのではないだろうか。

〔註〕

- [1] 葛田清「『聴く』ことのか—臨床哲学試論—」一九九九年・TBSブリタニカ 三九頁
- [2] 池澤豆圃「母なる自然のおっばい」取録「あとがき」二八六頁
- [3] 池澤豆圃「母なる自然のおっばい」取録「ガラスの中の人間」七〇頁
- [4] 池澤豆圃「旅をした人—星野道夫の生と死—」五四〜五五頁
- [5] 池澤豆圃「母なる自然のおっばい」取録「ぼくらの中の動物たち」二八頁
- [6] 池澤豆圃「神々の食」九四、六六頁
- [7] 池澤豆圃「エデンを遠く離れて」取録「山樞大陣に行くべきだろうか」四三頁



『むくどり通信』(一九九四年・朝日新聞)一九九七年・朝日学生文庫

『旅をした人—星野道夫の生と死—』(スイッチ・パブリッシング、二〇〇〇年)

『神々の食』(二〇〇三年・文藝春秋)二〇〇六年・文藝春秋

『アマールの自然誌』(二〇〇四年・光文社)二〇〇七年・光文社文庫